

研究所だより

発行 2013年7月15日
 明治学院大学
 社会学部附属研究所

〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37
 TEL (03)5421-5204~5

所長 西阪 仰

No.27

会話分析と裁判

所長 西阪 仰

昨年12月から3月まで、いろいろばたついていた。白髪も増えた。重要会議もすっぱかしてしまった。怒られるかと戦々恐々として大学に出たら、みなさん、逆に「大丈夫ですか」と氣遣ってくれた。

通常の仕事のほかに、いくつか緊急性を感じる仕事をしていた。東日本大震災のあと、福島県で避難生活を送る方々と、地元のボランティアのみさんとの相互行為をビデオに撮らせていただきながら、それを分析してきた。その知見をまとめて、一冊の本にするため、年末年始は原稿のとりまとめを行なっていた。これが1つ。

もう1つは、ある裁判に関わることになった。山形大学の学生O君が下宿先で遺体で発見される。残された携帯電話の最後の通話記録が119番通報だった。この通話のなかで、O君は救急車出動を要請していた。が、結局救急車は来なかった。このやりとりをめぐり、山形地裁で裁判が始まった。

昨年、この通話が原告（O君の遺族）

側の弁護士により公開されているのを、たまたま見つけた。分析的に取り出せることが、たくさん含まれていた。早速、本学でも非常勤講師としてお世話になっている小宮友根と早野薫の両氏と本格的に分析作業を行なった。その分析結果について原告弁護士からご質問をいただく機会があり、1月から2月にかけて、さらに分析を重ねた。その結果を、全部でA4の用紙20枚ほどにまとめたものが、現在、原告弁護士から裁判所に提出され、基本的に誰でも読めるようになってい

る。確かに、「病院に」一度電話をしてから、タクシーを呼ぶなりして、向かうようにしてください」という通信員の「指示」に、O君は「はい」と答えている。だから、O君は救急車の要請をしなかった、もしくは要請を撤回したというのが消防署および山形市の言い分だろう。もちろん、このような理解は成り立つし、実際、この通信員はそのように理解したのである。

しかし、この通話の問題は、そのような理解の可能性にあるのではない。この理解が成り立つこと（あるいは別の理解のありうること）を主張しても、この問題に対する社会的な（いや慎ましく「会話分析的」といべきか）貢献は、おそらくゼロだろう。私

たちが見出したのは、この通話全体において、通信員およびO君との間に貫して「構造的な理解の齟齬」（この質問が、あるいはこの返答が、通話全体のなかでどのような構造的な位置にあるのかに関する理解の齟齬）があるということだ。だから、通信員の側にどんな理解が可能であったとしても、それはこの「構造的な齟齬」のうえに成り立っていたという事実こそが、重要である。

この齟齬が構造的なものであるかぎり、その責任は、O君ではなく、119番通話の管理者の側にあると考えるのが、一般市民としての感覚である。もちろん、日々救命に携わる通信員たちの活動を貶めるつもりは、まったくない。この通信員も、こんな通話管理システムのなかで毎日人命にかかわる決定を強いられていたという意味では、システムの犠牲者というべきだろう。

このまえ学生と授業でR・K・マーティンの短い論文を読んだ。差別の是正のために直接的な制度的介入の必要を説くマーティンは、様々な社会過程の「潜在的な」（社会のなかで自覚されていない）機能・逆機能を明示することが、社会学の役割だと述べる。「社会問題の社会学」の今日の文脈のなかでは、いつも分の悪いマーティンだが、な

にか親しみを感じてしまったのはなぜだろう。

研究所各部門から

調査・研究部門

「人間」という観念は多義的である。あらゆる人が、あらゆる意味でこの言葉を使うことができる。全く相反するように見える意味たちの応酬さえ珍しくはない。たとえば、冷酷に他人を陥れ搾取する犯罪者を「人間じゃない」と言う人がいる一方で、まさにそれこそが「人間的」な振る舞いであるとみなす人もいる（「人間の本性をむきだしにした」といった言い回しを見よ）。このことは、私たちが人間あるいはその生（人生！）に好んで「奥深さ」を見出す習慣と結びついている。経験の表面ではなく、その奥深くに潜んでいるものの明瞭な姿を見極めることは困難であり、それゆえ各人はそこに各々異なるものを見るところわけだ。では、そのような「奥深さ」をめぐる暗黙の合意が壊れたなら、何が起ころう？ 人間であれ人生であれ生命であれ、その表面にすべてが露呈された世界に、仮に「人間」という言葉

が残っていたとしても、たぶんそれは単にひとつの生物種を指示する透明な名詞に過ぎないだろう。それは何やらおぞましい世界であるようにも思われる。ただ、そこにはもはや「人間的」な犯罪者も存在しえないはずである。一切の奥深さ——それを可能にする場は通常、「心」とか（「無意識」も含んだ）「意識」などと呼ばれている——を欠いた、人間ならざる人間たちの世界は、どこまでも健全で安全であるかもしれないのだ。

二十一世紀の幕開けを標しづけた小説『ハーモニー』において伊藤計劃は、近年の「心の哲学」と功利主義倫理学の人間像を敷衍することで、「これまでも同じように活動するが、ただ意識だけがいない（元？）人間たちの幸福なユートピア」という世界像を鮮明に描き出して見せた。だが「人間」へのノスタルジーを拭えない人にとって、それはもちろんデイスピアである。庄司創は、『ハーモニー』のその後を描くという驚くべき果敢な企てを漫画『勇者ウォグ・ランパ』において遂行し、別の結論の可能性を探求したが、その試みが成功したとは言いがたい。私たちは、万全の「安全」と「幸福」を手に入れるために、「人間」であることを引き換えにしなければならない

のだろうか。今世紀の思想は、なおしばらくの間、この問いをめぐって旋回し続けるだろう。

（調査・研究部門主任 加藤秀二）

相談・研究部門

相談部主任の役職も2年目に入りました。昨年度には、自己点検評価活動が行われ、それに基づいて、次期中期目標の設定も行いました。こういった作業を通じて、また、5月に行われた、港区立子ども家庭支援センター 保志所長との話し合いから、今年度は相談部による今後の事業のあり方のある種の「転換期」にあることを自覚したところです。

まず、港区との共同事業として過去7回行われてきた「地域こそって子育て懇談会」について。保志所長からは、区内における子育て支援事業者間のネットワーク形成について、その成果を大いに評価する声が伝えられました。しかしそれと同時に、これまで相談部が力を入れてきた個々の当事者による自助グループ活動については、区としての支援に限界があることも語られました。相談部においては、今後子育て世代のみではなく、多様な世代が交流可能であるような場づくり・グループ活動支援を目指していただだけ



2012年度 社会福祉実践家のための臨床理論・技術研修会の様子

に、港区との協働による「公的」活動と、相談部の独自事業という「民間」活動の住み分けを意識しながら、如何に展開していくのか、一つの節目を迎えている時期ともいえます。

また、「社会福祉実践家のための臨床理論・技術研修会」については、今後、「卒後教育」の一環としての明確な位置づけをどのように築いていくのか、という大きな課題があります。具体的な取り組みとしては、昨年度の社会福祉学科卒業生より、「卒後教育」情報を希望する方たちのメールアドレス登録を開始しました。まずは、社会福祉士国家資格試験に関する情報提供から取り組むことになりました。更に、今年度の研修会については、「卒

業生」に焦点を絞り、就労2、3年目の新人ソーシャルワーカー達の職場定着に必要な支援は何かを模索するという、基本方針が確認されています。福祉職者の早期離職は、社会的課題でもあり、調査研究と連動しながらこの事業が進められればと思っています。

学部・学科の教育研究との連携協働を意識した相談部事業を、本年度も進めていきたいと考えています。

(相談・研究部門主任 大瀧敦子)

学内学会部門

学内学会、正式には明治学院大学社会学・社会福祉学会は、1991年に設立された組織です。教職員、在学生、卒業生で構成されるこの学会は、研究活動のみならず、相互の交流を深める役割も果たしてきました。昨年度の活動の概略を振り返ることで、学内学会について理解を深めていただければ幸いです。

5月末には、学内学会の会報が発行されています。昨年21号、この『研究所だより』が皆さんのお手元に届くころには22号が発行されています。22号は、今年3月に退職された社会福祉学科の遠藤先生からメッセージをいただくとともに、学会の詳細な活動内容が記載されております。5月には学生

部会主催のスポーツ大会、6月には年次総会、8月には学生部会の夏合宿が実施されています。秋になると、学生部会では、社会学科のゼミサロン、社会福祉学科のコースガイダンスが開催され、学生目線による後輩への情報提供が実施されています。

昨年は、学生部主催の上映会で『隣人』が上映され、本学関係者以外にも観覧される方もあり、300人を超える参加者を得ることができました。この映画は、児童養護施設の実践を丹念に記録し、最小限の編集に押さえ、現実をストレートに伝えてくる内容となっていました。児童養護施設そのものに関する情報を事前にもたない場合、ややわかりにくい部分もあったかと思いますが、途中退席もほぼなく、上映後の監督講演にも多くの人が残りました。なお、本年度は精神障害者への支援の転換点を描いた『むかしMatoのまちがあった』が既に上映されました。

12月1日には、研究発表会が開催され、計22件の発表が3会場で行われ、100人を超える参加者のなかで活発な質疑が交わされました。また、年度末には研究誌『Socially』21号が発行されています。

今年度は卒業生部会に若い世代の役

員が加わってくださいました。学内学会全体のさらなる充実にとっても新たな力を得ることができると期待しています。

(学内学会部門主任 松原康雄)

新任挨拶

4月より調査・研究部門の研究調査員として着任しました。これまで、ケニアの初等聾学校を主な拠点として合計2年あまりフィールドワークを行い、人のいわゆる「コミュニケーション」のあり方について文化人類学的視座から研究を積み重ねてまいりました。

学部の卒論執筆時に、日本の障害者とされる方々がどのように生きているのかを具体的に知るため、施設に通



ケニア西部の丘陵地帯、リフトバレー州ナンディ県のある村にて。
踊っている子供の中に聾の子がいます。洗髪しながら踊っている子も！

たりそこで出会った方にインタビューを行ったりするなどの「調査」めいたことをしたことがあります。その時期、関係する論文誌が揃っているこちらの大学の図書館には何度かお世話になり、ご縁を感じております。

調査・研究部門では、主として特進プロジェクトの準備に関わらせていただいております。フィールドワークをするたびに思い込みから解放され自身が変わっていった経験を生かし、プロジェクトに少しでも貢献させていただければと思っております。また、たくさんの方々と交流を深め、多くのことを学んでまいりたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

(吉田 優貴)

市民講座報告・研修会案内

2012年度は、6月に市民講座を兼ねた「港区地域こぞってネットワーク会議」(港区内の子育て・子育て支援の関係機関/団体の情報交換と交流の場)、1月に港区立子ども家庭支援センターとの共催7回目の「港区地域こぞって子育て懇談会」を開催しました。

「港区地域こぞってネットワーク会議」の前半パートは、市民講座として「港区内の子育て・子育て環境の今」

いくつかの現場から」を行いました。NPO法人日本冒険遊び場づく



2012年度 港区地域こぞって子育て懇談会の様子

り協会」から冒険遊び場(プレーパーク)づくりについて、みなとボニータ(産後ケアを広めたい有志の会)から産後ケアの大切さやそのための相互支援について、港区立子ども家庭支援センターから子ども虐待に関する課題提起が行われ、参加者と共有しました。

「港区地域こぞって子育て懇談会」は、初めての分科会形式の井戸端会議を行いました。「人と人」「地域」がつながる、みんなで作ろうネットワーク・コミュニティ!」「外遊び! みんなで考えよう」「家庭教育を話そう!」子どもたちに伝えたい大切なこ

と」「世代、地域、つながり!」つながらる機会への参加を考えよう!」「家族が増えるとうどう変わる?」子育て・産前産後あれこれ」「子育て・家庭・地域etc.な〜んでもしやべり場」の6つのテーマで、159名のみなさんが参加し熱いディスカッションを繰り広げました(報告書ご希望の方は社会学部附属研究所までご連絡ください)。

二〇一三年度社会学部附属研究所プロジェクトの紹介

★一般プロジェクト

☆政治的過程におけるTwitter利用についての実証的研究

(代表 宮田加久子)

☆統治の哲学

(代表 稲葉振一郎)

☆近代間太平洋移動民に関する社会史的基礎研究

(代表 石原 俊)

☆第五回会話分析初級者セミナーの開催および中級者セミナーの構想

(代表 西阪 仰)

☆福島原発事故後における避難状況の変化

(代表 藤川 賢)

☆離島の高齢者生活と住民福祉活動のあり方

(代表 河合 克義)

☆妊娠と出生前検査に関わる女性の経験と社会の対応についての研究

(代表 河合 克義)

―都内における質問紙調査

(代表 柘植あづみ)

☆精神医学の「生物・心理・社会的アプローチ」の今後の方向性

(代表 村上 雅昭)

★特別推進プロジェクト

現代日本の地域社会における(つながり)の位相―新しい協働システムの構築にむけて

二〇一三年度社会学部附属研究所スタッフの紹介

所長 西阪 仰

調査・研究部門主任 加藤 秀一

相談・研究部門主任 大瀧 敦子

学内学会部門主任 松原 康雄

所員 稲葉振一郎

茨木 尚子

岩永 真治

新保 美香

半澤 誠司

水谷 史男

村上 雅昭

研究調査員(調査・研究部門)

吉田 優貴

ソーシャルワーカー(相談・研究部門)

濱田智恵美

副手 平野 幸子

教学補佐 坪井 栄子

学内学会部門事務担当 佐々木敬子

第27回社会福祉実践家のための臨床理論・技術研修会
総合テーマ「ソーシャルワーカーとしてのキャリアデザインをどう描くか」

日時: 2013年10月19日(土) 10:00~17:30

会場: 明治学院大学白金キャンパス2号館

10:00~12:00 (一般公開)

●卒業生によるトークセッション

ゲストスピーカー:

池田ひかり

(NPO法人女性の安全と健康のための支援教育センター運営委員/

明治学院大学ハラスメント相談支援センターコーディネーター兼専門相談員)

金子 充 (立正大学准教授/独立型社会福祉士事務所はっとポット監事)

13:00~15:30 (卒業生対象)

●ワークショップ

「迷い・悩みから生まれるもの

~ソーシャルワーカーのスキルアップをめざして~」

16:00~17:30 (卒業生対象)

●懇親会

社会福祉学科教員も参加予定です。

奮ってご参加ください。

連絡先

明治学院大学社会学部附属研究所

〒108-8636 港区白金台1-2-37

Eメール issw@soc.meijigakuin.ac.jp

TEL03-5421-5204・5205 FAX03-5421-5205